V.LEAGUE REBORN 記者会見

■ 日 時 2023 年 4 月 26 日（水）13:00〜14:15
■ 場 所 TKP ガーデンシティ PREMIUM 京橋 カンファレンスルーム 22F（東京都中央区）
■ 出 席 V リーグ機構 國分裕之代表理事会長、大河正明副会長
■ メディア オンサイト：20 社 22 名、オンライン 23 社 28 名
■ 議 題 「V.LEAGUE REBORN 〜2024-25 シーズンからの改革〜」について

國分会長が資料を基に、V.LEAGUE REBORN を説明し、大河副会長からの補足等の説明を行った上でメディアからの質問を受け付けた。その内容は、下記の通りであった。

Q. S-V.LEAGUE と新 V.LEAGUE へのチームの参加意向はどのくらいの割合になる見通しか。

A.國分会長
基本的に現行の V1 並びにV2 の上位チームについては S-V.LEAGUE への参加または参加検討の意向を伺っている。

Q.外国人選手の登録数を今後検討していくとの事だが、例えば何人まで枠を増やす、オンザコートを何人にする等、数字として示せるところまで進んでいるのか。

A.國分会長
登録数は拡大できるのではないかと思っている。どこまでが適切かは、チームの意見も聞きながら情報を集めている段階。

A.大河副会長
世界最高峰のリーグなので、外国籍選手 1 名だけということは基本ないと考えている。ライセンスについては 6 月を目処に説明会をさせていただく予定だが、現行の V1 が SV ライセンスの条件をクリアできるか、そして V2、V3 がどこまで詰め切れるかということがポイントになると思う。

Q.世界最高峰のリーグを目指すという点で、世界で最も上にいるリーグはどこになると考えているか。

A.國分会長
男子はセリエAイタリア、女子はトルコリーグを一つのベンチマークにして考えていきたい。

Q.V2、V3 であっても S-V.LEAGUE への申請は可能か。財政規模が大きければ競技力が弱いチームでも行けるということになってしまうのか。

A.國分会長
ライセンス申請は可能。競技力についての判断基準は設けていないが、別途検討する可能性もある。

A.大河副会長
チームには新リーグが 16 チームまで拡張していく間に、外国籍選手も含めたチーム強化を図ってもらいたい。それでもいつも最下位にいるようなチームがあれば、16 チームになった時点で、昇降格の是非も含めて一度しっかりと対応を議論する事を考えている。

Q.企業名をチーム名に入れるかのルールはどうなっているのか。

A.國分会長
正式登録名に地域名が入っていればよい。

A.大河副会長
名前というのは、運営法人を持っている場合の「法人名」、チームが自ら能動的に使う名前の「チーム名」、その他として「呼称」と「略称」がある。「略称」は 2-3 文字で表せる名前、「呼称」は一般的に V リーグが対外的に出す際に使用している名前。その中で、「チーム名」のところに地域名を必ず入れることを要件としている。

Q. S-V.LEAGUE と新 V.LEAGUE との対戦はあるのか。

A.國分会長
現時点では考えていないが、何らかの形での交流戦を行う等、選手が試合で活躍する機会、ファンの方に良いゲームを見せる機会は設けていきたい。

Q.「S-V.LEAGUE」は正式名称なのか。

A.國分会長
Strong、Spread、Society、スーパー、スペシャルと色々な意味が含まれる“S”を先頭に置き、正式名称「S-V.LEAGUE」としている。

Q. KPI の資料の中で、2024-25 シーズンに 12 クラブ以上となっているが、現行の V1 が全チーム参加する前提の案なのか。

A.國分会長
ライセンスが出ないと最終的にはわからないが、現行の V1 チームにヒアリングし参加を目指していただけることを確認している。男子はV2 の中にも S1 ライセンスを保有もしくは目指すチームがあり、女子は既に V1 は 12 チームあるが、V2 の中でも S1 ライセンスを持っている、もしくは目指したいという意向を表明されているチームもあるので、12 クラブ以上は目指せると考えている。

Q.KPI の 2024-25 シーズンの V リーグ機構収益が 20 億円と算出されているが、2021-22 シーズンが 7.7 億円の中で急激に伸びるというのはどういった試算になっているのか。

A.大河副会長
明確な確証があるということではないが、高い目標を掲げなければ REBORN にはならないという我々 V リーグ機構自身に課しているノルマだと思っている。スポンサー収入がメインだが、放映配信権、商品化権料、V リーグ機構の主管試合のチケット収入など諸々ある。

Q.ライセンス交付が 2024 年 4 月で、10 月に新リーグ開幕というのは間に合うのか。

A.國分会長
アリーナの確保については、ライセンスを申請した段階で仮確保してもらうようにしている。ライセンスの交付さえされれば 10 月からリーグができるような準備をしてもらう。

Q.それはライセンス申請した時点で、ある程度申請が通る見込みがあるという前提、という事か。

A.國分会長
見込みがあるかということは関係なく、現行も年度毎の事前の会場確保をしてもらっている。今後、ライセンスの中にもしっかりホーム会場を確保できることが要件に入ってくる。

A.大河副会長
V2、V3 はホームアリーナ、ホームゲームへのこだわりが非常に小さかったが、S-V.LEAGUE と SV 準加盟クラブは年間 20 試合以上のホームゲームを確保する義務が発生する。アリーナの確保をしていく事が原則になっていく。

Q.チームの資金調達の期間は大丈夫なのか。

A.大河副会長
基本は大丈夫。例えばサッカーの J リーグでも、J1 の場合か J2 か最後までわからないが、それぞれケースを想定してスポンサー料に同意して契約をしているので、V リーグでもそういった形が増えてくると思う。

Q.発足当初は 16 チームで入替戦昇降格なしとのことだが、将来的には入替戦を視野に入れているのか。

A.國分会長
まず 16 チームまでは入替戦なしでやっていく。基本的には拡張をして行きたいと思っているので、S-V.LEAGUE のライセンスを満たすチームが 16 を超えた場合、拡張することで考えていく。

Q.大河副会長
16 チームまで拡張した際に、経営努力、競技力の努力が更に必要だと思うようなチームが残っていた場合、入替戦をするか、更にチーム数を広げていくのかという議論になるかもしれない。16 チームへ行き着くところを見守りながら再度議論していきたいと考えている。

Q.世界最高峰のリーグにするために一番必要なものは何だと考えているか。

A.國分会長
先日行われたファイナルのような試合を、各試合、各地で再現していくことを目標としたい。かなりパワーがかかるしいろいろな努力もあるが、それがやはり最終的な世界最高峰のリーグたる所以になる。

Q.世界有数の選手たちが来てこそ最高峰のリーグに近づくと思うが、外国籍選手が来るためにはサラリーが上がらないと来てくれない。その点についてはどう考えているか。

A.大河副会長
世界最高峰という意義は三つある。一つは競技力で、世界最高レベルの選手が集まってきたり、V リーグでチャンピオンになったチームがアジアや世界選手権で大活躍をすることがその証になる。一方でそうなるために最も大事なことは、事業力とガバナンス力。ガバナンス力は日本にはある。東欧や南米のような給料の未払い遅配が起きないのが、日本のリーグの強みでもある。外国籍選手を日本に迎えるには事業を拡大していかなければならない。バレーは幸いなことに他のスポーツにあるようなダントツのリーグは世界にないので、世界最高峰の選手を日本に集めることにより、例えば海外配信権を得て事業を大きくして行く活路を求めることも可能だと思う。事業力、ガバナンス力、競技力、この三つが重なってこそ世界最高峰になると理解している。

Q.一言で言うと S-V.LEAGUE は現行の V.LEAGUE とどこが変わるのか。

A.國分会長
全ての試合で先日のファイナルのような、会場が熱気で溢れて興奮する白熱したゲームが展開できる。レギュラーラウンドでもファイナルのような試合をお見せすることができる、ここが一番変わっていくことだと思う。

Q.キャッチフレーズ的な、一言で何か分かりやすくここが変わると言った方がよいのではないか。

A.國分会長
キャッチコピー等についてまだ決めてないところもあるので、そこはしっかり検討したい。

A.大河副会長
バレーはサッカーやバスケットと違って現状から 90 度ハンドルを切る必要性を感じていないリーグ。運営法人を持つかどうかに関わらず、お客様をもてなして事業規模を大きくしていく方向に向かわなければならない。24 年から始めて、暫定ではあるが 27 年に向けて、さらには 30 年に向けて、真の体力が付いたリーグになっていくと必然的にプロ化をするのと同等以上の効果が表れる。そんなリーグを目指していく。

Q.ホームタウンについて、地域名をチーム名に入れるとあるが、ホームタウンを二つ以上持っているチームは集約していく方向なのか。

A.國分会長
基本的には一つメインを決めて、8 割以上をホームアリーナで開催してもらうことも考えている。

A.大河副会長
ホームタウンは複数あっても問題ないが、ホームアリーナは基本ベースを作ってもらうという理解。

Q.新 V.LEAGUE のレギュラーラウンドは東西カンファレンス制ということだが、必ずしもホームアンドアウェイの想定ではないのか。

A.大河副会長
東西に分け、東は東、西は西の中でそれぞれホームアンドアウェイで行う。

Q.SV のライセンスの基本要件は、どういうところを中心として考えているのか。

A.大河副会長
財務基盤とホームアリーナのところが大きなイベントになってくる。あとは U15 の育成に積極的に関わっていくことも一つのポイント。

Q.アリーナについては 20 数試合中 20 試合くらいをホームでやるという理解でよいか。

A.大河副会長
8 割ぐらいやらなければホームアリーナと呼べないと思っている。ただそう簡単ではないので一旦ゴールは 2027~30 年に置かざるを得ない。そのスケジュール感やどういう風にレベルアップしていくのかをクラブともしっかり腹落ちして、最後は我々の方でリーダーシップを持って決めていく。

Q.16 チームということだが、ミニマムは考えているか。例えばもし仮に 2 チームしかその意向を示さなかった場合はどうなるか。

A.大河副会長
ライセンス申請で出てきたものをマルかバツか審査するのが今までの V リーグ。これからはチームが新リーグの新しいライセンスを目指して、そこを乗り越えていくように寄り添っていくクラブライセンスに変えていきたい。担当者の一番のミッションとして、チームと一緒に仲間として SV に上げていくということが大事。

Q. 16 チーム集まった後、SV 自体を一部や二部に分けていく考えは現時点ではあるか。

A.國分会長
現時点ではまだ考えていない。地域カンファレンスがあるかもしれないが、上下でやるということは今のところは想定していない。

Q.大河副会長へ、B リーグでは年俸 1 億を超える選手を出すという明確な目標があったが、今回は何か分かりやすい目標はあるか。

A.大河副会長
バレーボールの一流と言われている日本人選手でも 1 億円までいく選手はいない。社業に戻るセカンドキャリアを優先する社員選手も大事にしていきたいし、一方で子どもたちが憧れるような 1 億円以上もらえるような選手も目指さなければならない。そういったデュアルキャリアのようなリーグにしていきたい。

Q.ある程度一定レベルの財政規模や戦力を保って、国内最高峰で戦うチームが 16 果たして出てくるのか。なぜ 16 チームという設定にしたのか。

A.大河副会長
外国籍選手のオンザコートルールと同時に移籍ルールも含め短期間で整備することによって移籍が活発になり、外国籍選手のレベルも上がる。それによって地殻変動が起きる。16 の根拠は、セリエ A イタリアが男子は 14 あり、世界最高峰であれば 16 ぐらいあってもよいのでは、というところから出てきている。

Q.大会方式について、「参加クラブ数により対戦カードの不均等が生じる場合は、前年度の成績をもとに上位クラブから優先に順位が近いクラブ同士の対戦が多くなるように組み合わせる」という記述があるが、平等性とリーグの盛り上がりとのバランスをどのようにとっていくのか。

A.國分会長
内部でもだいぶ議論したが、いずれにせよ不均衡が発生するのであれば、力がなるべく均衡したチーム同士が多く試合をすることによって、拮抗したより良い試合をお見せできるようにしたい。3 年という暫定期間をおいて入替戦をしないということは、その期間安定してチーム強化に専念できるということ。色々な強化をする中で、チーム力が結果的に上がり、白熱した力の拮抗した試合がお見せできると思うので、あえてそういう形で今回は設定している。

Q.ベンチマークとするセリエ A やトルコリーグと差別化して世界最高峰リーグになるために、打ち出していきたい日本ならではの特色についてどう考えているか。

A.國分会長
特に女子は世界トップクラスの選手が V.LEAGUE に来ている。それは日本のバレーに非常に特徴があって、拾うバレー、しっかり守備から攻撃に回るバレーを学びに来ている。守備力が強く組織的なコアの攻撃をするということは、日本のバレーの特徴なのでその魅力を世界にしっかり発信して行く。日本でバレーをやることにより、そういった力を伸ばし発揮できるリーグにしていけることが我々の魅力。

Q.選手の契約について、統一契約書を作る考えはあるか。

A.大河副会長
最低年俸については議論していないが、プロ契約選手については統一契約書を、アマチュア選手は宣誓書のようなものを作る予定。アマチュア選手であっても、V リーグに所属している選手としての責務を果たすということに対しての宣誓書が必要だと思っている。

Q.選手にはプロ契約を希望しているかのヒアリングをしているのか。

A.大河副会長
選手にはこれから研修会等で REBORN の話をしっかりと行った上で、そういった話し合いをしていく予定。

Q.ライセンスの要件は現状のものをそのまま使用できる形なのか、新しく作っていくのか。

A.大河副会長
大きな要件の一つは観客入場可能数。あとはアリーナの中のスペック要件として、アリーナ検査要項のようなものを作り決めていこうとしているところ。B リーグ等と、同じアリーナスポーツとしてアリーナを共通に使っていくということも、地域の話し合いで進んでいくと思う。

Q.スポーツリーグが様々ある中で、V リーグはどのような層にどのような魅力をアピールしていくのか。

A.大河副会長
V リーグはもう少しファミリー層や、競技経験者に広げていったほうがいいと思う。どちらかというと今は選手を見るために来ている観客が中心だが、地元のチームを応援するという意味での観客が増えてくるポテンシャルがある。昔強くて、今もメダルを狙える狙えないぐらいの位置に常にいるバレーボールの存在を知っている日本人はたくさんいらっしゃるので、可能性はある。

以上